

臥流心神

全

~13
2842



へ13
2842

以海之神

序

千金此春の朝よわ。山吹の海の
黄表紙子。青板の糸をまて
とど。まらびの糸を持て
是を以て糸が。志ありの種



下

の一粒もさる。毒の中よゝんで
作者れなる言せむ。其のよゝ
海いのどけかきし。茶の事
ちやふりぬ茶書番れ小冊。
これを何れ。神倉の一書事
しる。山乃。張りし

あゝ。室記もま。そ。秘
也。この枕紙もあふ。秘記
不。ぐ。枕紙のれ。予ら
是をひらふ。紙と名つけし事
もしたま。好士の懐中
子入。其を教せ。高家の

幸もあつて。筆と千
里にもうらす。寅の年の
彩板とまゐるの

書林某

三つと誌

い河ふ神

都島

いせんりて茶

一か

一紙の

口上

皇の代栄を吾妻ある。法藏前に
軒を並べ。黄^{ニホ}花^{ハナ}金^{カネ}咲^{サキ}山^{ヤマ}吹^{フク}の。花の^{ハナ}い^イ客^{キヤク}
子^コ見^ミとれつ。不思^{フシ}茶^{チャ}廊^{ドウ}子^コ取^{トル}付^{ツキ}世^セ番^{バン}。ホニニ
兼^{カミ}相^{サウ}とおあが。かく。内^{ウチ}鼎^{テイ}負^ネ強^{カウ}い^イ東^{トウ}
都^トの^ノ意^イ気^キ地^チ。一^{ヒト}つ^ツく^ク價^ケせん^ン茶^{チャ}の^ノ出^デ免^{メン}

と井垣や酌んずと。浅草宿の乾子
きも。青樓通ひの黄昏も。かゝるは
連を待た山と。形不すみか。隅田川。流れ
滑りの細元子も。よき首尾の紅杉を
得て。咲き瑞花の花川。また。ついで山
の宿。そらうま道は。形不すも。せめて。並木
不登島と。何れも。極く。花蔭も。雷神門
と諸共よ。おとす。あはれて。形不す。か。思

ハ。それ。おとす。前と。偏。一。幸。希。古
以上

形く。常。あ。牛。の。と。一
よき。商。交。と。と。れ。月

今日。の。れ

坪平 恒述

御休處

浅草の蔵前天王町

平野屋長八

古将口上

何れ。ね。れ。土。牙。に。か。祈。り。す。と。つ。あ。ま。し。
う。ま。と。ま。い。ぬ。本。所。へ。新。ま。い。ら。く。私。是。務。り。と。

すくか生蕎麦の柳より。細き手際の手打
そば。若梅の赤心に。少しもそむず。さら
はも。おあせにあびくと才一に。先初まの
四方山子候つゝぬたる花うらほ。法はあの
穂をひき扱や。夏ハ涼の祀切重詰。
まてお浴衣のきあけ。秋ハ毎の月よのま
夜とありたる蒔籠そば。冬ハたじも
信濃の雪にさらしぬ。心の無枝。井戸

にあり。水道のわい。方圓の器と清水
がしんすむ板まのく。善悪の手際と
あふ。時節の志し文月や。及ばぬ草の
は梅あひ。ひら半切のちりかきめて。及ばぬのま
長くはひき法評判の程奉希く以上

賀松桂庵店開 呼平主之述

引扱新杉雪 鹽梅薬味花
本町開店後 評判止茲家

出まらふやちを舞れ花の客

葉ふおまほと侍り

二月のり

本町二丁目南側
松桂庵

序

坪平主人述

柳やつれが菴と申す。尚のたもとよあま
市三伝多日本橋より二町上方。草の街
に後新道。紫々々其中に在る料理の商

賣ゆぐの酒の碑さあふ。急ままの森
食を献じ。朧と曲ら工風の献立。鯛の味噌
以て四角山に。手際も鱈のあけれども。尾に尾
と附ては披窓の盛りりそふ花の夜密に。四
時と方たず出は下。蟹斗鶏卵の四角
と見そへ。傾城の實とゆふ。毎日豆
膏の馳月夜よ。おまへおされては寿布
で。野邊の小松菜。萬菜。それが初音の萬

くも。料理の價は下安。殊。上巳此
節。大關鶏の玉子と。と。が。付。あ。り。下。河
に花の梅蛸。端午の鐘。旭。れ。剣。び。り。
卯。鬼。と。ま。ら。ふ。も。酒。の。徳。又。み。月。の。七。夕。の。色。
紙。を。膚。に。み。そ。一。文。字。の。加。葉。と。を。い。ひ。書。
れ。得。意。二。つ。の。星。へ。偏。し。願。の。糸。菊。菊。う。
ま。い。虫。の。評。判。と。菊。の。苜。勺。の。重。福。と。
ま。ま。は。用。の。數。々。と。合。せ。て。調。度。五。苜。勺。

の料理は、いづれも風味よく。道具は産
物まきびや。は好い事。注意。此。等。即。為。料理
重。詰。等。清。込。仕。物。の。多。少。子。の。解。き。や。何
卒。出。置。願。員。古。取。立。と。思。合。為。目。より。旅。の。為
の。先。米。此。程。の。希。く。以上

日本橋通三丁目新道
礎若庵
中の一やうに
おきこめあつてこそせ

水俣口上

和店し後 法所中極此具真亦取を以て
日を増し大繁昌仕全く法得意極方法
陰影と難有仕合ま物に地多 何かあり存
付新製乃柏餅并待宵云んこと中と仕出
し大安賣仕に儲夫存此間去り法得意極
に法尋り申すまふハモミ 蒲園ひんりの轉
察をかひらちらと申すまふハモミハモミハモミ

中これバハテ朝悔りの猪牙舐めかおこつたこ
とあせとやれ青樓で夜とあすうふれ
車ちやとのあはちうーまに付わが下面白し
と耳に大笑所しハが兎角六切ある法を
極方あり安く高きハ コリヤあは焼と存す
れど御す利久まぢうも儲の首雪七木
の裏せん極心かきあつめみぢん法とそ字の
山かちり菓子を足捨て花やきのあは

里にすふやあしう南京殿了因とあやと
相取かしちやふぬの種とまきせんぬ濡
手で粟餅そのひひおきある恩と拙者ち
まよあがらまんぢう今日堂印の初者
蒸餅とらぬのさあ玉はしきあよとあか
らふたあま地知んあむいまのあけ
判偏子宜しくきり希くは

草子目録

京傳

壬子五月

浅学小藏初瓦所
鈴木屋如泉

説帖

料理着板。即席座了。初らんか。天地蓮
根の甚間に。有べきはどの皆様く。是より口
上り上。ます草のまのたの意の物。キの字
は是世ふあけれどちよりて西客のおもて
料。それか吸物不着。何でも此間と念ま

すれば。豆蔻とそふは白飯一匙れ。生薑
ねぎ 火達拂山菜味噌。酢の鰯魚乃る世にふ
 く。年がくくふつ々の衣着。年一付る丸れ
 る香々も。おし。金も。不は。おれく
 多紀出。物一切出。一。一。一。其
 妙鉢子神たり。梨の腐き。梅び。は
 價。い。も。ら。ん。ち。よ。く。の。物。日。に。惜。し。無。見
 め。の。の。物。の。志。禮。と。お。も。ひ。月。日。の。た。り

秋。よ。ま。の。鞋。の。む。づ。を。より。き。一。上。ま。す。ら
 いた。通。り。手。前。味。層。吸。に。何。れ。ね。ど。も
 ち。よ。と。何。の。つ。て。あ。り。し。ら。それ。筋。筋。ら
 お。ち。點。と。ま。ね。く。鮠すまきの。し。と。海。き。利。か
 も。ま。の。の。お。ま。解。か。さ。で。ま。ま。け。ら。り
 細。工。中。の。ま。の。の。大。道。具。の。備。前。の
 芝。の。大。志。お。け。ま。け。お。れ。の。大。入。の
 當。り。芝。の。お。き。ど。り。え。小。鯛。の。鄭。の。お

しやい〜。我も〜と出さず。何年迄
長原迄取立。千秋萬年まん。さい
相か〜ぬお駕を。ひら〜。福元
味嚼新生善。夢と紫菀との穂と
うやまらてまをす

京傳子作

呂書目録畧之

九月卒日より

後江町丁目録

濱友

報條文

これ〜ある志間の如き見。春の上陸の
花の果日くら〜涼は向嶋。と詠らつる
ゆく者魚の雪の夕暮。と澄々〜豊のそ
はめとゆく思ひ廻せば。四季とり〜の樂も
さ記らつらめは口そが〜。心でや此世
生れては孝行も〜ぬとあり。十五が
勸進〜くけふがため。白晝下は建てる。

閻魔も自身に出ぬ。古人もたをいひり
る。花より團子を食ふより。食気。月の隈
かたを見。花の盛り。花の極めるとも。膨らたし
ふ。まきほけや。よみて柏の餅をいふ。あまを。束
哲餅の意を避ければ。能因餅の若を残し
盧生。の栗餅の残り。元政。の鶴焼の論。唯
光子の日の餅を献じ。音八麻子の餅と。蓬く
葛蒲園子と。味ひて。頼政と。ちと捨て。大和園子

と井戸にて。梅田も。ちと。提げ。伊勢の。編笠
焼。の。傾城。の。実。を。め。け。何。十。堂。の。金。餅
焼。の。快。活。の。勢。を。現。す。桃。を。や。が。め。子。う。わ
鬼神。の。惑。り。珠。岐。婦。の。虎。餅。の。勇。者。の。和
ま。き。花。の。ち。り。の。鶴。餅。の。丹。を。か。初。音。の。音。を。こ
と。と。り。か。水。の。住。む。舟。饅。頭。と。彼。が。美。味。名。を。と
備。り。上。戸。の。と。れ。と。残。し。む。れ。と。彼。仁。和。寺。の。具。門
の。如。記。過。り。餅。組。の。う。ま。か。く。下。戸。の。達。を

たる蔵ありとどあもや園子の若も何れが
 餅屋の蔵の酒屋に負ず。門前子地客お得意
 西の手に、桃と極々様餅。もも論現金
 大安賣。私店ハ望てハあく待宵子三味線
 強て新規普請。新粧とふ、深川詞ま
 突出しのたははぬあ。かろく山の昔も兎も浪
 ととびたんご。相子と揃てうとあけ、うら
 の山邊の十たんごも。小粒めあるといふ判の身

より唯此具原と代栢の。花と双々園目
 八月、悪き風味しよい。とお取あ。栄耀り
 餅の替りぬ繁昌。樹子餅のあろ。お評判
 て餅あふ入せま。りしよ。う吉田の兼好

つれ／＼草
 月花志んこ
 山口取

進物折詰 志ん

賀月花糝粉店開

鹽梅開店買人連

風味散雲儲日錢

評判一流尤突出

月花新子負深川

右京傳子作

長谷川町南西側吉田屋喜次

口述

下浮鳥渡は標高を中上を以ては常所
相婚の手おそはの儀。死に類多し何
おろしは座をくし共日けて私めとの
仕方ハ正座してんと元手ともか 甚
大事の挽ぬきとのか記ある後の右うすは
かけ渡せは實氣を多ういぬきゆて天の
恵をつあ記とあし みが記ゆがれり五川
の清きあれ子。悪とさよふ。あがく無昌可

祿とすまゝの貴き室の山十、此のめで
後、その世の松葉節、おろし大根のかき利分
も、盛込うつこのさらし、とけ毛、唯松、
の揚あり、まは得意極と大切とほは
す、手打の新見世と今、日の出の東あきら
橋のありと、と流河判、其ま、の、
よる、の、の、の、の、の、の、の、の、
も、希と、
と、希と、
と、希と、

上とれが、
かき、
かき、

日本橋通一丁目 東橋庵

上原口上

以恩、
私、
系、
以、

枇杷の枝を携へて川の流しに三味線の
指をとめば。園田のりせの畦まで長岐
とくまみで。かゝる名所のかははく二重
四方の志まがすま年天らしの婦人もあ
おたりまらたり亭主が料理小刀細工
よれいともいそふまあんでよくする者とほ
評判のあつづいばあが大根のあそき
利をみぢく積りておの草のうまじやが

るまでおお稽名模の血取まあがげを志
しやけりや。はれはるは備きあ

あつせりと福の日に友のあめりせが
たふおみりとのくのうまらや

本膳亭坪子

本所二丁目和中華ノ裏

壬子十月

小雲屋音平

お恐又と心の上書お披露よりま

あつせりと福の日に友のあめりせが
たふおみりとのくのうまらや

梅の板方より打て後 店びきののび、未熟の
若ともあ集りお調法からなるいゝめ、
一とて誠の花の心、戸の心、負強き、
是れ封めひらく、
月の今に後さる、
右の心息を報せん、
新そばの出来より、
江戸一日本橋より、

に言ひて、
後の曇りあき、
さけぶ、
てお釜の、
六平、
はら、
橋、
麦改め、

子橋の——子打の連中——うつて替はるは
河判と偏し——七も希く望

日本橋二丁目

東橋菴

九月

えんそばひきふらの文

真曾波報條之文

本膳亭坪平應需

口上

此傳又い思きと心由抄あまよひといふ
次第に成はるる去る能は概纏と相成はるは

至極草紙の随ひます。て私店へ候。年月不置
頃。所い流江左の真津中。中子尚多の聲は
是子金の小判の耳より。安子極き。子打
此新是世。場所に恐れぬ病下棒の。み
とき者く此名所りも。心あまより。考むが
の風味がよ。の。日増存ます。考高の
と中へア、流がも。あがせ。心
頭も軟く此得意極へ。冥加の存子此

眞實、新香、眞深、大寺。大事、はたけ、何れ
と極の。法恩、いれ、もさ、石印、を心細く、挽留
重。ふく、い、け、た、る、御、慈、の、み、ち、ん、と、ひ、ね、の、交、へ
す、く、撃、ぐ、利、分、の、薄、く、も、つ、あ、か、る、月、日
い、ま、あ、く、法、用、此、有、る、極、に、任、持、も、甚、お、け、し
體、あ、か、る、廣、く、積、り、て、西、出、を、ま、つ、た、る、さ、き
葉、味、の、品、々、奇、麗、よ、う、う、き、し、い、ち、ま、し、
い、ま、さ、意、い、し、し、。丹、と、申、す、も、各、極、の、出、取

立、の、ま、目、の、意、も、是、。於、る、お、替、。法、用、ま、く、月、本、終
く、た、り、て、濤、世、と、志、ん、著、意、の、言、出、し、と、あ、敬
て、奉、り、た、か、上

四里、何、か、い、く、り、き、を、げ、や
月、の、若

丑
菊、月、の、白、り
本、町、三、丁目
松、桂、菴
長、保、口、上
私、店、へ、候

先、以、心、拙、平、法、修、意、も、申、す、目、の、紙、書

此来等ら成下り後正清し西自音雅有仕
念ま給ふ。さて私事為りて城より内信仰り候
はり奉給候。此でよ縁若共く立り候所
當年ハ殊の外蒼蒼と来候。ききとの
断事ひある好。うの萬葉候てふ四谷より
池の^{the}喜慶の引枝と。一粒櫻より改し
としら張月のひろは海をて 取集め慶
生が候り 粟の飯より 最そつと云々

ついでに飯。夢に粟も五十年と
一時の栄花よ千とせし延る。此粟とと思
ひ。唐いさ江戸に任あがり。せまに二階へ出
たり候。誠と實との此立と。一向は光
候。程を希ふ立

此是夏に著る 坊子志

う袂しはあの飯

少所下目録
国回書清書清

さく子ね月

御洗粉此説帖

私

病を高くします。此の功効といふは。
 一色を練（ま）二合に染ませ。若し染つる色は、
 崑崙國の手習子。煤掃（ま）やとせられし并度
 々。炭團の化物か。うゝまほし色の黒き尉と
 のも。忽ち奇特めはれて、八朝の妹（お）牧九陰目の
 小浪。遠東の豚（お）こあやの胤。雪中の地藏尊。甚と
 明たる瀬鴻が七日と待たず立所に。濡きでつむ。栗

津が原。彼置盤（お）が盤（お）此（お）ごう。白くある事奇
 妙。深山鳥も鷺（お）とあり。向の胡麻の黒きと
 へ。向方の鶴の白きに愛し。志を先ひあす。志を
 ちんどんをきんらんやちめんもめん。真の志み
 物も。このあひひ。我は用ひあはれ。知識（お）や
 あら。瓶つき。良医と得る。童（お）の病。さらば金
 とおちる事。上手の活すも終（お）のこごう
 昔もたれ。石壁をい川。せんたくに

もは洗粧の何所をきく。流れてきこむ桃のこぼ
く。最ち一つふれと買ひ来り。身仕舞部ぶ
の演り。此りよこの評判つよく。髪洗目子
さきより。月づきの廿七日にちは、殊おかし妓きのあきりむき
りれ。疥かゆ 飼かま 西にし 乾かん 黒くろ 痣あざもあきりむき
まの卵たまごのこぼつやとゆ。言語も即すなは西にし施せと
あり。夜鷹も忽ち言尾と見く。茶ちやをがむ
ふは圍かこたてを。あきりむき。うらぎの髪

の毛のちぢれ。まで其のびるこも大海日あま
そばのこぼれ。されづ。谷羽やうの大佛おほも白毫びやく
の調うた盤ばんまで。清きよの法ほふ手て水みづあきりむき。
おき袋ふくろもませ取とひ。品しん川がわもあきりむき。
おき袋ふくろめきばされ。門かど前まへもあきりむき。
寶たからの網あみの目めから。身みをたせむ。大おほはかり
もあきりむき。お得意おとぎのうたもあきりむき。
おき。此こくともあきりむき。おき。大おほ入いり

大勢昌仕は極相の外ならず。八三ののり
ひきに通じ。坂出。物とは何判よ
〜奉布六

京傳先作

江戸本町を丁目

鳳榮堂

調合賣弘

村上太吾衛

品書目録有り 畧之

説帖

本膳亭

坂平述

は考案と云はれしあがぶ思ふと海せい
とあり。またこの梅の心面。雪は〜となお茶よ
里も枝群れ。能多〜。かゝる家々の敷
々ど。ひめ屋と云ふ口惜き。花のぬらりの
金目ゆき。金龍山〜。ち〜。も所々
折々多弘。いま。遠近の。此得意極む
何とも求め。長よ。かゝる^又店をめぐります
又梅のつぼみの南京焼。小間物道具唐物

類から大和におもて私店此行
 判編しき希ふは

月日

浅草並木町
 梅谷清助



柳私先祖千代と込なる是行の。伏見の
 の梅谷。當所は於てあまひまするはよ後づ
 代の覺の甲せん。まんぢの池の水館。
 先づ水館の功徳。あまひの勿論甘あのごとく
 く。花のみどり子乳あくとも。此水館より
 ちきれではぬり。やそ盛りの成長。花
 もきあくや當所。あまひたれ
 是を用ひて忽ち胸のひく事。南枝の

梅のしるしをうつとまや— 其外常子にあられ
ば。辰とこが— 瘧とけし。聲とゆき、の響の
初音とけちる位へ。まさき次ハ香葉の。香
ハ梅花の葉子にらむ。煎ハ仙家の秘傳を
四季のかけんのそのまゝハ。心と養ひ。肺
保ち。其れよ音曲好の仕方ハ。必由用ひと絶
其茶夢と出たぬ—。まろく夕の七ツ梅を
す—あれ。朝あけ子袖の毒とあらう—よりへ

東西のきき首ハハ差中—ます。素初の赤梅
前まへ中ちゆう葉えふ。先せん私し製せい。葉製乃せん製ハ
作しやう者しやう。此こ最さい立たるる製せい者しやうは能のう名なは在ざいるる所しよハ
終しゆう所しよハ何なにがた所しよ—き新製しんせい者しやう上じやうは
名なとユま作しやう者しやうハ名な多たしあふ日本橋にっぽんばしの製せい子
は産うぶるる也なり。朝あさハ松葉しょうえふ此こ茶ちや込こ込これれバ。夕ゆふは夕ゆふ
かハの製せい者しやう。誠まことハ山海さんかいの名産なみんは産うぶるる所しよハ
銘めい人にん智者しやう者しやうの身みと盡じん—らる自在じざいハ

素の如皇も怒をかき。おそろ 轉信勝も
出素の。弟清見世。千と毎。山吹。初玉。一
喜櫻を呼くおまひ村。家意見世をも傳
茶とせし。させん皇の折詰も。何でも
自由の何でも四文。三文に言ふ度か
月十と店せしせい一げい。か。口とき人か
在。あまひが先代の持前の三珍物新製
不及愚業。只右うれ。たきとひて新力ぬ

毒の焼と焼中。風味中一製。新糖を
たんと入し。生得の何まひを相まけ。きれいなる事
恰もあまひや。高し海のこく。おまひはんも
其ごとく。未々日ま。い。水あ。出求。出出
と程と南の。す。ま。ま。と。希。と。口。と

あまひはあまひより
よ。あまひはあまひを。あまひはあまひを。
あまひはあまひを。あまひはあまひを。
あまひはあまひを。あまひはあまひを。

ちりりれと海

本膳亭

訂けりて

坪平迹

七條口上

叔の意極がまゝとす私にまゝく
より沙料理は色一高臺は色誠は高
地し繁島あり事ハ中し其ハ水道の
流れハたゞして。まゝ此生解を志し
その生解ハ何れぞ。吾にとせぬ上何れ
ハ花ももろと下も何れ。時よ最てのが

とむはまの詞のまをくし海目のやま

下らし代物いふの料理の花。四時

はさずして即席のひらく事ハ是れ

私高きそ。章集の極美。生善の梅

酢花雛花塩花松葉。酒ハ雅波の七

梅。香がけ山の花盛りと一時の月ハ後

入れ備置も。大鉢ハ水もあめハ月も

る。飯ハ上白真白。うづはにうづ

廿六日... 其外... 家具等
と... 上戸... 下戸
様方の... 合す。... 酒の...
... 利... 下... 上...
... 南... 義理一通と...
... かく... 船... 舟...
... 各... 随... 百... 二...
... 字... には... 何... 具... 頁

此酒判を奉希願の上

酒判を仕切りにありや滝の水

お客をたぐずりや...

品録畧之

丑の五月

小瓶... 百...

田屋清...

...

